

# 福州版大藏經における刻工と印面

——東禪寺版——

牧 野 和 夫

## 一、はじめに

本稿は、東禪寺版大藏經補刻葉の刻工の精査を通じて福州版大藏經の刊・印・修についての若干の問題点を指摘し、従来の漢籍を含めた南宋刊本の刊行時期推定の基準の補正に及ぶことを意図した研究の一端である。近刊の佐々木勇氏「宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入された理由」(『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部63号2014)など、宋代の刊一切経の研究の進展は目覚ましいものがある。個人的な関心から着手して既に久しいこともあり、以て福州版大藏經の書誌的調査の意味するところの一斑を示すものである。調査上のひとつの関心は、一般的な一括りの基準である十帖(十音義一帖、帙・函などに

収蔵)を積み上げた時の高さ・一辺(左右)への片寄りである。片寄りは、積み上げることで顕著になる。佐々木氏の指摘は個々の一帖の片寄りの補正という。わたしの関心は、積み上げた際に生じる左右の極端な片寄りの補正にあり、「積み上げる」作業から齎された問題点を両面刷の方向から指摘してきたことに連動するものである。

いまひとつは、補刻・印面(刻工・印造工)の問題である。既に高山寺旧蔵(南宋)刊『大藏一覽集』卷二の刊行時期については東禪寺版大藏經補刻葉の刻工の精査より得られた刊行時期推定の基準を活用し、おおよその推測を試みた(牧野「日本現在(南宋)刊『大藏一覽集』について」、続考は別に稿を設ける予定)。南宋刊行『大藏一覽集』の舶載流布の速さを測る上で看過し得ない作業である。また、

近刊「東禪寺版大藏經補刻葉における刻工の一側面——刻工「牛智」「蔣成」等の組み合わせ——」（『実践女子大学文学部紀要』57集 2015・3）は、東禪寺版大藏經の補刻葉の精査に基づく刻工の活躍時期の確定作業が結果的に齎す成果のひとつを紹介したものである。福州などの刊行に係る南宋刊本の刊行時期推定に確度の高い多くの情報を提供できることである。

今回の報告は、それらの端緒となるものである。

## 二、印造記の問題——王公祀堂本を軸に——

いわゆる王公祀堂本と呼称される『大般若波羅蜜多經』（東禪寺版）が各地に所蔵されている。古く大藏会などに展観され、研究者に知られていたが、とりあげた論攷として主なものを挙げるならば、寥々たるものである。

中村菊之進氏「宋明州王公祀堂本大藏經考」（『文化』48—1・2 1984）

梶浦晉氏「日本現存の宋元版『大般若經』」（『金沢文庫研究』297号 1996・9）

同氏「日本の漢文大藏經収蔵及其特色——以刊本大藏經為中心——」（『漢文大藏經国際學術研討会 論文集』2007・9）他

近刊の野沢佳美氏『印刷漢文大藏經の歴史』（立正大学品川図書館 2015・3）の解説によれば、次の通りである。

「明州王公祠堂本——東禪寺蔵——

東禪寺蔵の遺品のなかで「明州王公祠堂本」と呼ばれる『大般若經』がある。もとは、鹿児島県志布志市の大慈寺の所蔵といわれ、多くの帖末に福建路按撫司参議官の王伯序が明州（浙江省寧波）奉化県忠義郷の父の祠堂に納めた「大藏經」であることをしるした、紹興壬午（三二、一一六二）年の施入記が添付（別印）されていることが特徴である。

大慈寺に「明州王公祠堂本」が将来されたのは十四世紀後半という。その後流失・散佚し、現在わが国を始め中国・台湾・アメリカ・ドイツ・スウェーデン等に所蔵・保管され、現在およそ五三帖の所在が確認されている。刻工名が東禪寺蔵のそれに一致することから、「明州王公祠堂本」は紹興三二年に印造された東禪寺蔵本である。（3頁）

筆者も既に次の如き記述を行った。

「東禪寺版開雕が元豊三年（一〇八〇）頃「大般若」から始まったとするならば、初印よりおよそ八〇年の歳月を経て刷印されたのが、王公祀堂本である。八〇年の歳月は、数次に亘る補刻を必要とするに十分な年月であったようである。家蔵『大般若波羅蜜多經』巻一八の印面状況につい

ては、既に報告を了えているので、卷二百七十九に就いて、金庫文庫蔵本と比較しつつ略述する。印面の清爽・濃淡の度合いに於いて区々である。既に複数回に及ぶ補刻が行われたことは明瞭であり、刻工名を有する板が補刻と認められることも確実である。「牧野」宋版一切経補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺『東方学報 京都』73冊 2001:3)

その詳述を試みることにする。閲覧実查をおえている九点について、印造記と刻工名(一字名は除く)を示す。他にも調査を終えた数点があるが、今回は反映できなかった。今後の補充を期したい。

A 立正大学図書館蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第八一

〔張華造(单郭・黒印)〕刻工「葉通」「丁紹」「林受」

施入記：「紹興壬午(三二、一一六二年)五月」王伯序題

B 立正大学図書館蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第五一七

〔鄭保印造(单郭・黒印)〕刻工「郭寧」「鄭球」

印造者印：

施入記：なし

C 家蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第十八

〔王□印造〕

D 家蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第二百七十九

〔葛昌印造〕刻工「付及」

その他に

E 天理大学附属図書館蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第三十八

〔鄭保印造〕 14板磨滅激しい

F 阪本龍門文庫蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第五百四十六

〔林彦印造〕刻工「王保」「蔡純」蔡純担当葉、磨滅やや

激しい

G 龍谷大学図書館蔵

『大般若波羅蜜多経』卷第五百三十七

「何文印造」单梓墨文印（2・6×0・8糎）

参考・中国国家図書館蔵『大般若波羅蜜多經』卷第五百三十九

「何文印造」单梓墨文印（2・6×0・7糎）。本文を四角のブロック状「文字欠け箇所？」に切り抜き、背面から刷反故紙背を宛て墨にて補筆する箇所が複数存。板木の劣化甚だしい例。

H 龍谷大学図書館蔵

『大般若波羅蜜多經』卷第十二

「王□印造」刻工「鄭求」「宥代」

I 京都大学附属図書館（谷村文庫）

『大般若波羅蜜多經』卷第三百九十八

「陳伸印造」刻工「用元」。右掲の中国国家図書館蔵本と同様な箇所が認められる。

これに未だ実査の機をえないが、資料面で補うことのできな奈良市薬師寺蔵の4点がある（奈良県所在 中国古

版経調査報告書 2001:3）。

○『大般若波羅蜜多經』卷第二十三

「王惠印造」

○『大般若波羅蜜多經』卷第二百三十七

「□□康印」（掲出末尾書影に拠る）刻工「周光」「陳正」

○『大般若波羅蜜多經』卷第四百五

「陳實印造」刻工「蔡純」

○『大般若波羅蜜多經』卷第四百六十四

「葛昌印造」刻工「林韻」「丁紹」「林大」

東禪寺版について印造記の検討を少しく行う。印造記は、次節の王公祀堂本の印面と刻工の関連を考える上で必須の調査項目である。東禪寺版の印造記を、日本現存宋版一切経の調査済みの各蔵に拾い調書を整理すると、以下の如くなる。

知恩院蔵大藏経は開元寺版を主体にした一蔵であり、東禪寺版は数量としては乏しい。

昭和三十年代の調査記録（文化財指定の為の調査、と云われている）の閲覧の際の抜き書きメモを基に、平成15年九月以降今年に至る調査資料を併せて、東禪寺版の印造者名・印造記を見るに、

林祐印造、陳珣印造、林璋印造、韓椿印造、李忠印造、李意印造、鄭寔印造、葛政印造、葛敏造、陳伸印、謝賜造、林彦印造（「林彦造」も）、林壽院造、林璋印造（「林彦」と雅函を担当）、林生造、張華印、楊義印造、王興印造、謝嵩印造、王惠印造、鄭保印、

などである。

醍醐寺蔵宋版大藏経は総本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』（全六冊、平成27年 汲古書院刊）として刊行された。目録解説に拠れば、「東禪寺版では「東禪経生」の名前から、東禪寺版の印刷・製本専門の印造者がいたと考えられる」とし、「この開元寺版の印造者は所属等が未詳である」とも述べている。

東禪寺版の印造者は、次の三十名乃至三十二名であり、

林傑、張榮、王賜、陳宥、鄭確、林璋、鄭寔、楊義、鄭永、王愈、葛凱、何思、葛敏、林祐、林俊、鄭保、王惠、王興、林受、何嗣、葛紹、葛■、王口、何似、楊口、林仁、鄭顛、鄭碩、林璟、陳均、鄭昌、李忠

「それぞれが担当した印造帖を収納した函の一覧」を掲げて「一人が一函分を纏めて担当するが、中には二人以上の複人数で一函内の帖を担当したものもある。（一覧の「\*印」）（『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第一冊 P72）」と指摘している。

高野山（勸学院）蔵大藏経に関しては、「宋版一切経目録」（『水原堯榮全集』巻第四巻に拠る）の詳細な記録に従う。

楊義、李忠、王興、謝嵩・李意、陳伸、鄭寔、張榮、林祐、陳珣、林璋、林昌、葛敏、林俊、林生、何聡、李宗、韓椿、張華、王惠、鄭保、林壽、謝諤、陳禧、

林晶、林璟、陳孟（? p242）、の28名である。

本源寺蔵大藏経の東禪寺版の印造記を見るに、

林文印造、〔福〕州東禪経／生葛悦印造、林璋印造、

鄭寧印造、葛同印造、葛紹印造、楊震印造、

の7名が確認できる。

東寺蔵大藏経の東禪寺版の印造記（平成十三・四の両年

の調書に拠る。多くは未調査）は、

葛憚印造、葛同印造、葛紹印造、葛紹造、林璋印造、

鄭仁印造、鄭寧造、楊庸造、

約7名である。

各蔵の印造記に見られる「印造工名」のおおよその動きや活動期を検討することは可能である（印造記の書誌的な詳細な検討は別稿に譲る。今稿は印造工の姓名の判明するもののみを採りあげる）。

別表NO.1は「東禪寺版印造記各蔵一覧表稿（2015・7・3現在）」である。

参考として、現在判明している各蔵東禪寺版の最終補刻・施入時期（推定も含む）を列記しておく。

王公祀堂本・紹興32年（1162）施入識語（押印）？

前後以前。

知恩院本・宗像大社管理（興聖寺蔵）色定法師一筆

一切経（一一八七～一二二七年）の主たる  
底本と推定。従つて一一八七年以前船載か。

参考・補刻刊語「廣州……」（醍醐寺本多  
し）が無いか（丙午ナシ）。淳熙丙午13年  
（1186）以前。

高野山本・淳熙己亥6年（1179）以降。淳熙丙  
午13年（1186）以前か（水原刊記奥書  
目録にナシ）。

醍醐寺本・慶元丙辰2年（1196）補刻（『弘明集』  
巻第四・11板、「福州東禪経／生林受印造」  
以降。

参考・高野山本は「李忠」「王興」が印造を  
担当。刻工名は余記（巻4）・李興（巻5）・  
蔡謝（巻6、醍醐寺目録は「蔡附」と）以降。  
本源寺本・東寺本・いづれも「甲午（端平元年）  
1234年）」（『十誦律』巻26・12板）  
以降。

この別表NO.1は「東禪寺版印造記各蔵一覽表稿  
（2015・7・3現在）」を一覧して興味深いのは、最終補  
刻・施入時期から判断した刷印順序にほぼ重なることであ  
る。王公祀堂本の印造担当者名「何文」「葛昌」「陳實」の

3名は知恩院本以下に認められない。「林彦」は知恩院本  
にのみあり、「張華」「陳伸」「林壽」は知恩院本・高野山本、  
「王惠」「鄭保」は知恩院本・（高野山本）・醍醐寺本に存す  
る。この傾向は、知恩院本と高野山本にのみ共通する「韓椿」  
「謝嵩」「陳珣」「李意」「林生」の5名、知恩院本・高野山本・  
醍醐寺本に共通する「王興」「葛敏」「鄭寔」「楊義」「李忠」  
「林祐」の6名を列記して、顕著になる。最終補刻期の近  
接した各蔵においては、東禪寺所属の同一「経生」が多く  
印造を担当していたことが明瞭になってきたのである。高  
野山本と醍醐寺本とに共通する経生名「張榮」「林璟」「林俊」  
の3名が知恩院本以前になく本源寺本以降にない傾向と軌  
を一にし、本源寺本と東寺本に共通する経生名「葛同」「鄭  
寧」が醍醐寺本以前に認められない傾向に同じである。お  
そらく活躍時期は長くて2、30年ということになるうか。  
「林璋」は知恩院本以降、全てに顔をのぞかせているので、  
あるいは40年以上の活躍を想定できるかも知れないが、異  
例である（長命の故か、南宋当時の重要な指標となる平均  
寿命など考慮する要あり）。明らかに各帖巻頭の題記中の  
年期とかけ離れた刷印状況が窺われるのである（刷置きと  
いうケースを考慮したとしても、初印・極早印時の刷置き  
を想定することは難しい。摺置き忘れ（デッド・ストック）  
は除く）。

東禪寺版印造記各藏一覽（未見分：薬師寺藏本加える）

	王公祀堂本	知恩院本	高野山本	醍醐寺本	本源寺本	東寺本
王恵	王恵	王恵	王恵	王恵		
王興		王興	王興	王興		
王愈				王愈		
何思				何思		
何嗣				何嗣		
何似				何似		
何聰			何聰			
何文	何文					
葛禪						葛禪
葛悦					葛悦	
葛凱				葛凱		
葛昌	葛昌					
葛紹				葛紹	葛紹	葛紹
葛政		葛政				
葛同					葛同	葛同
葛敏		葛敏	葛敏	葛敏		
韓椿		韓椿	韓椿			
謝諤			謝諤			
謝嵩		謝嵩	謝嵩			
謝賜		謝賜				
張榮			張榮	張榮		
張華	張華	張華	張華			
陳禧			陳禧			
陳均				陳均		
陳實	陳實					
陳珣		陳珣	陳珣			
陳仲	陳仲	陳仲	陳仲			
陳宥				陳宥		
鄭永				鄭永		
鄭確				鄭確		
鄭顯				鄭顯		
鄭昌				鄭昌		
鄭寔		鄭寔	鄭寔	鄭寔		
鄭仁						鄭仁
鄭碩				鄭碩		
鄭寧					鄭寧	鄭寧
鄭保	鄭保	鄭保		鄭保		
楊義		楊義	楊義	楊義		
楊震					楊震	
楊庸						楊庸
李意		李意	李意			
李宗			李宗			
李忠		李忠	李忠	李忠		
林璟			林璟	林璟		
林傑				林傑		
林彦	林彦	林彦				
林壽		林壽	林壽			
林受				林受		
林俊			林俊	林俊		
林昌			林昌			
林晶			林晶			
林璋		林璋	林璋	林璋	林璋	林璋
林仁				林仁		
林生		林生	林生			
林文					林文	
林祐		林祐	林祐	林祐		
□□康	□□康					

この基準を以て手許の調書類記入の印造記一、二につき検討を試みるならば、印工陳仲は、上海図書館蔵『瑜伽師地論』巻第八（東禪寺版・鼓山大藏経ノ内）に「陳仲印造」とあり、知恩院本・高野山本の刷印時期を一応目安にすることができよう。

「開元寺版印造記各蔵一覧表稿（2015・7・3現在）」も同様に作成したが、今回は省くが、その表に拠れば、かつて次のように記述した「秀衡経」の「葛昂印造」についても新たな推測が可能になる。「中尊寺一切経でいえば、〔第七十二函 同（大般若波羅蜜多経） 巻第一〇八奥書 葛昂印〕（前掲水原堯榮氏「秀衡経目録」頁五七）とある」（十二世紀後末期の日本舶載大藏経から兪然将来大藏経をのぞむ）『海を渡る天台文化』（2008・12 勉誠出版）と。「葛昂印」は、印造記を模写したケース（色定法師一筆経にも例がある）で知恩院本・醍醐寺本の開元寺版に認められる印造担当者名であり、「秀衡経第七十二函 同（大般若波羅蜜多経） 巻第一〇八」の底本が蜀版ではなく開元寺版と判明する。

旧稿を訂正することもできたので、簡略に記す。「陳全印造」の『法集経』巻第六について、かつて次のように紹介した。

「同じく前号78号に紹介した江藤正澄自筆『随神屋所蔵

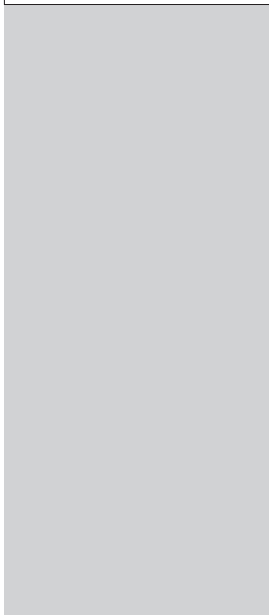
目録』に著録された一点「法集経巻第六 一折」について附記し、前々号77号の一部を訂正しておく。『法集経』巻第六の印造記として記述された「陳全印造」印は、印面の同異の検討を残すが、同名の刷手の開元寺版が知恩院蔵宋版大藏経や中尊寺蔵大藏経などに認められるのである。仮に同一人の印造記とすれば、刷印時期は中尊寺蔵大藏経の思溪版の奉納識語（吉祥院）に基づく施入時期を遙かに下るものとなり、開元寺版は思溪版施入以降の欠帖を補う過程での補配となるう。」

と記述した。『法集経巻第六 一折』宋版陳全印造所傳未詳／（『実践国文学』78号 2010・10）も、あるいは、中尊寺蔵宋版大藏経の流出の一点か、との可能性を指摘できる。同一印造担当者名であるが、知恩院本・醍醐寺本の印造記「陳全印」は3文字であり、中尊寺現蔵「發覺浄心経」巻上・尾、同経巻下・尾の印造記は「陳全印造」と4文字である。江藤が「所傳未詳」とした4文字印造記「陳全印造」の「一折」が中尊寺蔵大藏経の断簡一折である可能性の極めて高いことになる。そして、現在、王公祠堂本に4文字印造記「陳全印造」が存在するという報告はないが、可能性として残ることになり、「遙かに下るものとなり」との記述は正確性に欠けるもので訂正されるべきであり、ここに訂する次第である。



三、王公祀堂本に見る印面と刻工（補刻）の問題  
『大般若波羅蜜多經』卷第十八・二百七十九を軸に――

巻18 前表紙：梨地後補



『大般若波羅蜜多經』卷第十八

一卷一帖

香色梨地後補前後表紙（二九・八×十一・二糎）左肩より打  
付け墨書「大般若經卷第十八 地」見返しナシ、

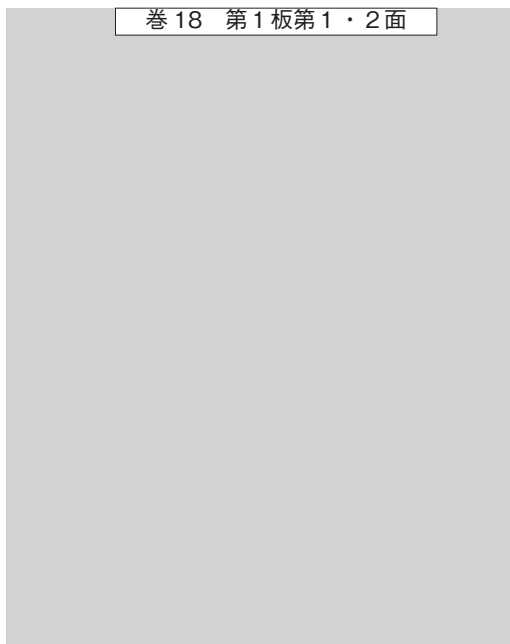
内題（千字文）…「大般若波羅蜜〔多經〕卷第十八 地」、  
卷頭以下「初分教誡教授品第七之八／復次善現所菩薩摩訶  
薩者於意云何即」

版式、天地横単辺界線（界高二四・四cm）、一紙一版六面毎  
面六行（計三十六行）々十七字、無界、料紙黄染やや厚手  
竹紙、十五紙。破損・虫損あり、裏打補修。

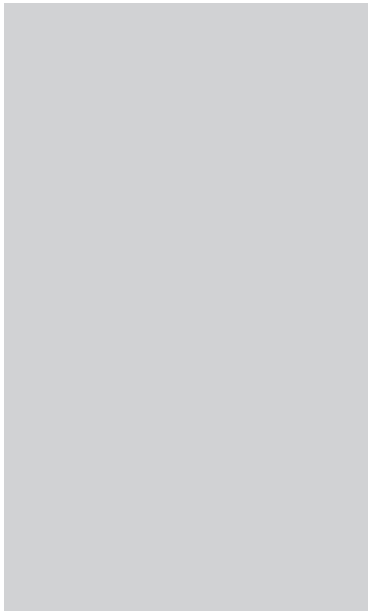
版心…「 地 十八卷（版数）（刻工名ほほナシ、稀  
に有）」

刻工名…正（6）、明（8、9）、才（11）、澤（15）  
印造記…「王□印造」（単辺・黒印）

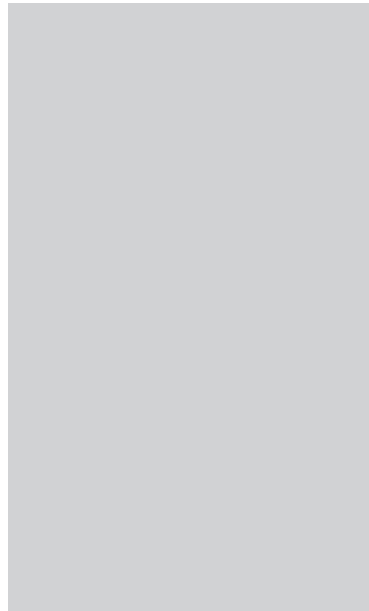
巻18 第1板第1・2面



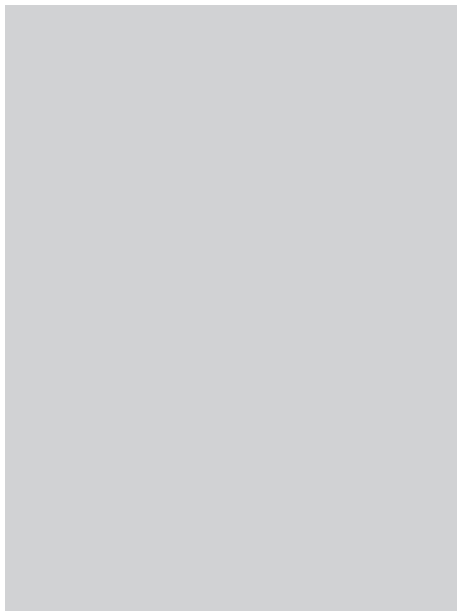
施入記：「紹興壬午（三三二、一一六二年）五月」王伯序題  
ナシ（後見返しナシ、直ちに表紙）  
表紙の体裁から明らかに王伯序題を附した王公祀堂本と一  
具の大般若。  
版心の位置が、複雑である。第1・2・3・5・7・8・9板は、  
版心が4（2）面と5（3）面の間（外に出る）で、6面  
毎の版心余白はなく、12行連続し13行目（2面と3面、4  
面と5面）との間に版心余白有。他は毎面6行の一般の版  
式。



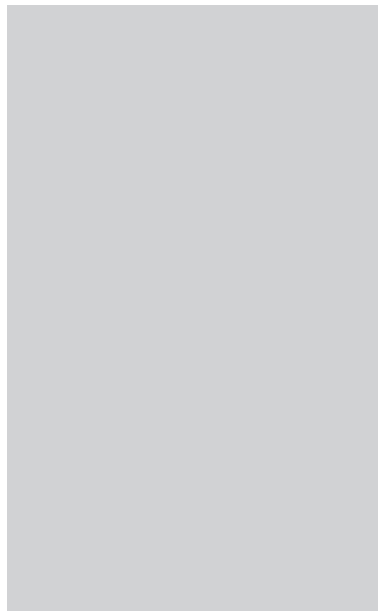
卷18・11 板版心 刻工名「才」



卷18・4 板版心 刻工名ナシ



卷18・14板 第3・4面 太り・欠け



卷18・12 板版心 刻工名ナシ

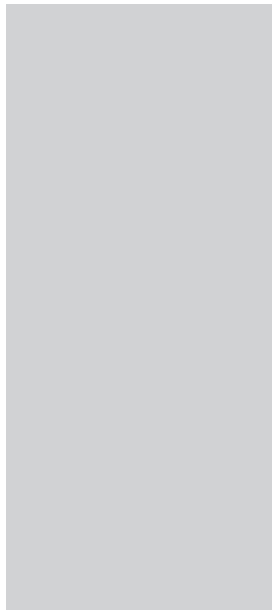
毎板の印面を示して、磨滅具合を見るところであるが、第1・4・11・12・14板を掲示する。第1板と第2板は文字がやや太さをもつようになる。第2板3・4面あたり「身」「増」などにも認められる。第3板には、そうした若干の磨滅は認められない。第4・5板は文字の太りが6面全てに及び、5板5・6面にはカスレて文字が欠けている。

それに対して第6・8板は第3板ほどではなく8板6面一行などに磨滅も認められるが、大きな磨滅はない。一応、比較的清爽な板として挙げられるのは第11板で、太りはない。

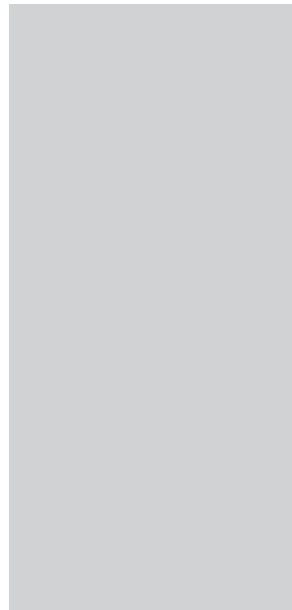
最も磨滅して太り・欠け・割れなどの顕著な板が第12・14板である。第15板は、第3板に近い印面である。刻工名を有する「正(6)、明(8、9)、才(11)、澤(15)」は明らかに補刻葉であり、しかも補刻も数次にわたることが明瞭である。

こうした印面の差異を考慮すべき研究段階に近年の調査は至りつつある。「東禅寺版開雕が元豊三年(一〇八〇)頃「大般若」から始まったとするならば、初印よりおよそ八〇年の歳月を経て刷印されたのが、王公祀堂本である。八〇年の歳月は、数次に亘る補刻を必要とするに十分な年月であったようである。」と記して既に15年の歳月が経過している。

次に『大般若波羅蜜多經』卷第二百七十九の仔細を印面に観察してみる。



卷 279 原装縹色後表紙



卷 279 前表紙：梨地後補

王伯序題王公祀堂施入識語捺印(?)

每面六行(計三十六行)々十七字、無界、料紙黄染やや厚手竹紙、十二紙。破損・虫損あり、裏打補修。

版心・1・2・8板・1面と2面の間」 歳 二百七十

九卷(版数) (刻工名・呉(破損、1)、ナシ(2)、盛刀(8)、

3(7・9)11板・1面と2面の間」 歳

九卷(版数) (刻工名・ナシ(3・5・6・9・11・12)、用(4)、澤(7)、付及(10)」

印造記・「葛昌印造」(单边・黒印)

施入記・「紹興壬午(三三、一一六二年)五月」王伯序

題有(見返し3面、第三面に有)

『大般若波羅蜜多經』卷第二百七十九 一卷一帖

香色梨地後補前表紙(別の王公祀堂本表紙の流用か。

二九・六×十一・二糎)左肩より打付け墨書「大般若經卷

第四百一十二「二七九、歳、目三八」(朱紙貼紙墨書)」、

中央下方に「生」と別筆打付け墨書、その墨書下に「孔

印/□□」(白文朱印 一・八×一・八糎)。縹色原後表紙、

見返しナシ、

内題(千字文)・「(破損)」、

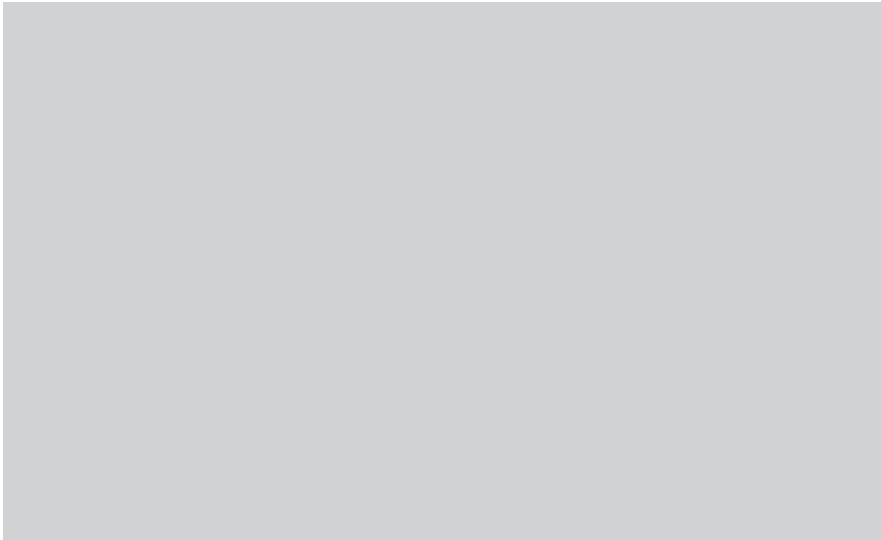
卷頭以下「初分難信解品第三十四(破損)／復次善現一

切智智清浄(破損)」

版式、天地横单边界線(界高二四・八cm)、一紙一版六面、



卷279 第1板1至4面：いわゆる「普通」の印面



卷279 第4板6面 刻工名「用」

卷279 第5板1・2面版心 欠け・細り・太り 刻工名ナシ

第5板がやや文字に細り（瘦せ）・太り（磨滅）の傾向が顕著になるが、他は多少の磨滅の度合いに微妙な差異はあるものの、ほぼ、太り・細りが目に立たない「普通」な印面と云える。7板は刻工「澤」で界高が22・9糎と狭く印面や、清爽、雕刻時期を明らかに異にする。

巻279 第7板1・2面版心 刻工名「澤」

印面の状態（とりもなおさず、板木の状態）を問題として導入する時、参考にすべき東禅寺版『增壹阿含經』卷第三十一末尾にある重刊記がある。醍醐寺蔵本で示す。

「印造印」「鄭顕造」

「卷末刊記」（重雕刊記）皇叔崇慶軍節度使知西外宗正事士衍伏観／福

州東禅寺大藏經板年代（寢）遠字畫漫滅不堪印／

造特施俸資命工損者重修朽者新刻圓滿一歲計／

五百六十餘函庶傳永久所集鴻因仰祝／今上皇帝聖

壽無疆國泰民安風調雨順天下太平／法輪常轉紹興

二十八年五月日謹題

勸縁住持傳法解空大師慧明」（醍醐寺目錄第三冊頁

70）

紹興壬午（三二、一一六二年）頃における数次に亘る補刻を予想するならば、おそらく『增壹阿含經』卷第三十一尾題近くの「紹興二十八年」慧明勸縁の施財刊語「命工損者重修朽者新刻」（既に先行研究が指摘）以前に数次に及ぶ「修」が東禅寺所属の刻工の手によって施されていた、と考えるべきであろう。ちなみに印造工「鄭顕」は紹興28年以降の活躍を示す確実な資料である。しかも、「陳六」の担当板木である。

宗像大社管理（興聖寺蔵）色定法師一筆一切經の主たる底本と推定される混合帖の知恩院本は、淳熙丙午13年（1186）以前の刷印状態を示す。約九八〇帖（朝日道雄氏「京都知恩院蔵福州版大蔵経刊記列目」〈『密教文化』72号〉に拠る）混在する東禪寺版は、舶載東禪寺版の印面状態を考察する上で、紹興28年（1158）の重刊を経た淳熙丙午13年（1186）頃以前の板木の磨滅状態を観察しうる貴重なものである。

今後の課題として、『阿毘達磨大毘婆沙論』を試験的にとりあげて検討する。「①ナシ やや悪」は、第1板には刻工名「ナシ」、印面は「やや悪」ということを示し、「⑥」女弟子林：「一片」印面悪↓醍醐寺本補刻」は、第6版に「女弟子：一片」の施財刊語がありその印面は悪く、醍醐寺本では更なる補刻葉になっていることを示す。

『阿毘曇毘婆沙論』巻73

① ナシ やや悪

② ナシ 悪

③ ナシ

（途中略）

⑥ 「女弟子林□□□□在／堂二親捨錢□□□□一片」印

面悪↓醍醐寺本補刻

⑫ 善通 印面普通  
以下、同様である。

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻6⑫卓立 印面普通

印面悪…④⑥⑦⑩↓醍醐寺本④⑦⑩補刻

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻17⑬陳六 印面普通

印面悪…⑥⑧⑪⑫↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻18⑬李儼 印面普通

印面悪…⑩↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻20⑬吳守 印面普通

印面悪…⑥⑧⑩↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻23⑬丁思 印面普通

印面悪…⑥⑧↓醍醐寺本⑥補刻

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻24⑬林用 印面普通

印面悪…⑦⑧⑪↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻25⑬ナシ 印面普通

印面悪…①②⑥⑦↓醍醐寺本⑥補刻（安撫使賈…）

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻27⑬ナシ 印面普通・やや悪

印面悪…③⑫↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻29⑬ナシ 印面良

印面悪…③⑩⑦施財刊語「候官縣林茂昌為考十六

郎彫捨」印面カナリ良↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』巻31⑫具宥 印面良

印面悪…③⑦↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷34(12)了宗 印面普通

印面悪…③④↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷45(12)蔡純 印面悪

印面悪…④↓醍醐寺本④(12)補刻

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷48(12)陳六 印面普通

印面悪…③⑥⑧↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷49(12)陳正 印面悪

印面悪…①⑧(11)↓醍醐寺本①補刻

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷51(12)ナシ 印面やや良・普通

印面悪…⑦⑨↓醍醐寺本⑧⑨補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷54(12)謝感 印面普通

印面悪…①⑤⑨↓醍醐寺本⑤⑦⑨補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷56(13)林用 印面普通

印面悪…⑤↓醍醐寺本⑤補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷61(13)林用 印面普通

印面悪…①④⑥⑧↓醍醐寺本④⑧補刻(安撫使賈…)

賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷65(13)李興 印面普通

印面悪…①⑤↓醍醐寺本①補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷66(12)陳(日+シ) 印面やや悪

印面悪…①②④⑨⑪↓醍醐寺本⑨補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷67(12)ナシ 印面悪

印面悪…④⑧⑩↓醍醐寺本⑧補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷88(12)了宗 印面やや悪

印面悪…⑥⑩(11)⑨施財刊語「崇賢里薛惠為先考薛念五郎捨此板」印面カナリ良↓醍醐寺本⑥⑩(11)補刻(安撫使賈…)

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷90(12)ナシ 印面悪

印面悪…①⑧↓醍醐寺本同ジ

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷93(12)卓立 印面やや悪

印面悪…①②↓醍醐寺本①②補刻

『卓立』了宗「李興」「林用」「林用」「謝感」「陳六」「吳宥」「丁思」などは、印面が悪くもなく良くもない「普通」の範囲

である。王公祀堂本『大般若波羅蜜多經』卷第二百三十七

に認められる「陳正」の如く印面悪のものは殆どないが、

尠いのである。「蔡純」は、醍醐寺本で補刻になっているが、

「普通」に近いものもある。「蔡純」は極く初期の補刻葉に

認められる刻工名で、他のほとんどは、ほぼ紹興年間後期、

乃至それを若干遡る頃の刻工ではないか。「陳六」が尾題



近く「紹興二十八年」慧明勸縁の施財刊語(埋め木ではない、と判断した)を有する『増壹阿含經』卷第三十一の13板補刻葉を担当していることを以てしても、「紹興二十八年」前後乃至それ以降の刻工である、としてほぼ誤らないのではないか。

また、尾題を有する最後尾の板に刻工名を認めることのできない帖が想外に多い。しかも磨滅甚だしくして補刻を必要とするものが少なくない。このことは、王公祀堂本のケースにも云えることで、おそらくは刻工名を持たない状態が原刻に近いという推測を可能にする(既に憶測は記したことがある)。王公祀堂本に認められる刻工名「葉通、丁紹、林受、郭寧、鄭球、用元」は印面普通か、やや良、清爽(刻工は、郭寧、鄭球など)の状態である。龍門文庫本に見るように「蔡純」のみ印面「やや悪」であり、知恩院本の「蔡純」も同様である。「陳正」は、葉師寺藏本を書影で見ると限り印面は「普通」か、やや「清爽」である。二、三十年後の板木に磨滅が顕著になっていくようである。王公祀堂本・知恩院本・醍醐寺本に認められる刻工名の多くは(個々に要検討ではあるが)、原刻葉のものではなく補刻葉のものであり、字音釈に函担当の刻工名を刻した音義もまま混じるが、その刻工名は補刻の際の版下注記を刻したものと考えてみてよいのではないか。

刻工「葉通」「丁紹」「林受」「郭寧」「鄭球」「付及」「王保」「蔡純」「鄭求」「宥代」「用元」の担当した板木(刷印葉)の内、蔡純担当葉のみ、磨滅やや激しい。他は「普通」。「林受」は、金沢文庫・書陵部藏宋版一切経の開元寺版『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』卷四の第1板を担当した刻工のようで、その題記は「敷文閣直学士左朝議大夫清川府路都鈴轄安撫便知渡」州軍州提举学事兼管内勸農使賜紫金魚袋馮裁恭為「今上皇帝祝延聖寿捨俸添鍍経板三十函補足昆慮」大藏水翼流通勸縁福州聞元禪寺住持慧通大師了「題」である。「馮懺」については既に「馮懺勸諭賑濟詩／紹興辛未歲歎米貴瀘帥馮懺出俸錢買米減價糶賣賑濟救民賦詩示幹事人」という記述をしめした(中村菊之進氏「宋福州版大藏経考(3)」『密教文化』154号 1985)に詳しい)。紹興辛未歲は紹興21年(1151)で、おそらく紹興壬午(三三、一一六二年)施入の王公祀堂本の刷印に係るかどうか、微妙なところである。

#### 四、まとめ——傳文・葉元・呉定などの事例——

まとめに変えて「刻雕時期と刷印時期」に関する一事例を採りあげる。刻工「呉定」などの検討事例である。「福州東禪寺経生」を冠した印造記などの変遷に基づきつつ、

印面の観察による刻工の参画時期の異なりの推定を行いたいが、その試験的な検討の一例として「除六行：両邊無厚薄」注記をもつ東禪寺版5面一板一紙の担当刻工を採りあげたい。

今回の醍醐寺宋版一切経目録の刊行によって、従来から知られていた「除六行：両邊無厚薄」注記をもつ東禪寺版5面一板一紙のほぼ全貌が知られることになった（東禪寺版主体の醍醐寺藏本の悉皆調査が長らく待ち望まれていた）。

目録并佐々木勇氏の論究（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部63号 2014）によって明らかになった「除六行：両邊無厚薄」注記をもつ醍醐寺本東禪寺版の経名・卷次・刻工名・印造工名は、以下の通りである。

- 2444 『中論』卷2 刻工：傳文 印造工：王賜
- 2445 『中論』卷3 刻工：具定 印造工：王賜
- 2463 『般若燈論』卷15 刻工：傳安 印造工：王愈
- 2464 『十二門論』 刻工：葉元 印造工：王□
- 2465 『百論』卷上 刻工：具定 印造工：王愈
- 2475 『廣百論釈論』卷7 刻工：開進 印造工：王恵
- 2478 『廣百論釈論』卷10 刻工：葉平 印造工：王恵

2535 『撰大乘論』卷下 刻工：克恭 印造工：楊□

2537 『撰大乘論』卷中 刻工：克恭 印造工：楊□

2580 『撰大乘論釋』卷4 刻工：傳安 印造工：葛敏

2581 『撰大乘論釋』卷5 刻工：陳孟 印造工：葛敏

2583 『撰大乘論釋』卷7 刻工：林元 印造工：葛敏

2584 『撰大乘論釋』卷8 刻工：王佑 印造工：葛敏

2585 『撰大乘論釋』卷9 刻工：葉住 印造工：葛敏

2603 『究竟一乘寶性論』卷2 刻工：陳證 印造工：王□

2637 『大乘廣五蘊論・大乘五蘊論』刻工：陳孟 印造工：林祐

2638 『寶行王正論』刻工：葉叢 印造工：林祐

2647 『如実論』刻工：葉文 印造工：林傑

2651 『廻諍論』刻工：葉住 印造工：何嗣

2660 『長阿含經』卷1 刻工：林元 印造工：鄭保

2700 『中阿含經』卷16 刻工：曹達 印造工：ナシ

2702 『中阿含經』卷18 刻工：郭志 印造工：林璋

2703 『中阿含經』卷19 刻工…開進 印造工…林璋

印造工は、「王賜」「王愈」「王惠」「葛敏」「林祐」「林傑」「林璋」「何嗣」「鄭保」の面々である。東禪寺版印造記一覽稿を参照すると、王公祀堂本・知恩院本・〔高野山本〕に共通する印造工名は「王惠」「鄭保」、知恩院本・高野山本に共通する印造工名は「葛敏」「林祐」「林璋」であり、「王賜」「王愈」「林傑」「何嗣」など多くは醍醐寺本に初めて登場する印造工たちである。

刻工名は、「傳文」「傳安」「葉元」「葉平」「葉住」「葉叢」「葉文」「陳孟」「陳證」「林元」「王佑」「呉定」「克恭」「郭志」「開進」「曹遠」という顔ぶれである。「陳證」「林元」「呉定」「郭志」「開進」が刻雕を担当した板木で刷印した数帖の調書（平成26年）に拠って印面を検討したい。手許に用意できる最新の調書で行う。

醍醐寺蔵『根本薩婆多部律撰』卷7（千字文「母」）は、  
①ナシ 普通 ②⑤陳證 普通 ⑥⑭⑯⑱陳正  
普通 ⑮ナシ 普通 「王惠印造」

醍醐寺蔵『阿毘曇毘婆沙論』卷31（千字文「箴」）は、  
①ナシ やや悪 ②ナシ 普通 ③寔 良④生 良⑤聳  
良⑥江滿 やや良⑦彬 やや良⑧ナシ 普通⑨⑩やや  
悪 ⑪ナシ 普通⑫郭志 普通 「鄭保印造」

醍醐寺蔵『阿毘達磨大毘婆沙論』卷73（千字文「廉」）は、  
①⑫ナシ 普通 ⑬呉定 普通 「林俊印造」

醍醐寺蔵『阿毘達磨大毘婆沙論』卷77（千字文「廉」）は、  
①②ナシ 普通③ナシ 普通（やや悪も）④⑪ナシ 普  
通 ⑫林元 普通 「林俊印造」

参考・知恩院蔵同経同卷 ③普通一部磨滅 ⑤⑦⑩やや  
良 林壽印造

比較的時間早い時期の補刻か、と思われる刻工「蔡純」の  
担当した板木に拠る帖を見るならば

醍醐寺蔵『阿毘達磨大毘婆沙論』卷68（千字文「義」）は、  
①ナシ 普通 ②ナシ 普通 ③太 やや良④⑤賓 やや  
良⑥俊 やや良⑦王保 やや良⑧志 良⑨王文 やや良  
⑩⑫ナシ 悪 ⑬蔡純 悪（やや悪） 「林受印造」  
これを知恩院蔵『阿毘達磨大毘婆沙論』卷68（千字文「義」）  
で見ても、

①ナシ 普通 ②ナシ 普通 ③太 良④⑤賓 良⑥俊  
良⑦王保 良・やや普通⑧志 良・やや普通⑨王文 か  
なり良⑩⑫ナシ かなり悪 ⑬蔡純 悪 「王興印造」  
との印面の注記があり、平成18年の調書であるが、ほぼ  
同様な印面である。すなわち、醍醐寺蔵（宋刊）『大藏經』  
に認められる「除六行…両邊無厚薄」類注記の刻雕時期  
は東禪寺版補刻期のある時期（憶測で紹興2・30年代と

仮にしておく。今後の調査で検討したい）に当たり、補刻期の刻工に対する注記として補刻葉版下に係るものであるう、と推定するのである。直接の注記の向けられた対象は、題記に認められる原刻葉と緊密な年月日に係る大藏經事業参画の工人たちではなく、ある時期の補刻葉を担当した職工（版下・刻工・折工（？）などの人々、総責任者？）に對してであった、と考える。

本源寺蔵『集沙門不応拝俗等事』卷1・14板巻尾 刻工名「具定刀」：「甲午（端平元年：1234年）」（『十誦律』卷26・12板）頃刷印。

例えば刻工「具定」の刻雕した板木は、本源寺蔵本（約30年後の刷印）においても、「やや悪」い磨滅する葉もあるが、未だ十分刷印に堪えるものであり、従って原刻葉ではない。

本源寺蔵『集沙門不応拝俗等事』卷1・11板2・3面 磨滅甚だしい部分

原刻葉に係る刻工・印造工などに向けて「除六行……両邊無厚薄」類の注記が必要であったかどうかは、改めて整理し考察されねばならない問題である。

なお、5面1板が最末葉の直前に存在する事例については、既に事例を挙げてその生成過程を推測指摘したが、他の事例も含めて別稿に記す予定である。

今回も貴重な典籍の閲覧調査の御許可を賜った醍醐寺・知恩院・東寺・本源寺、京都大学附属図書館・天理図書館・龍門文庫、国外では中国国家図書館・上海図書館の各位に深甚の謝意を表する。

\* \*

本稿は、平成二十七年八月三十一日に行われた和漢比較文学会第八回海外特別例会（於西安市西北大学）三日目の口頭発表の内容の一部である。

追補として、「一九九五年一〇月二四日」と年月日を附した「中村菊之進」氏の「古経目録」に拠り、四点の王公祀堂本を加えておく（梶浦晋氏の御厚意に拠る）。なお刻工名一文字は省く。

○『大般若波羅密多經』卷45印造…「何文印造」

刻工名「余記」「余奴」

○同経卷144 印造…「丁慶印造」

刻工名「葉安」「林安」

○同経卷145 印造…ナシ

刻工名「陣雄」

○同経卷213 印造…「韓椿?印造」

○同経卷297 印造…ナシ

刻工名「丁思」「唯道」

\* \* \*

本稿もまた平成27年度科学研究費・基礎研究（B）（課題番号…26284040）の助成による成果であること  
を附記する。

（まきの かずお・実践女子大学教授）